躍動美と気品が魅力
初来日のカナダ・バレエ

舞台中央の揺り椅子に白髪の老人。背後に数十人の若者たち。若者の問いかけに老人が答え、老人の動作に若者が応じる——。

六月十四日、東京五反田の簡易保険ホールで幕開けする、カナダ・グラン・バレエ日本初公演の人気創作バレエ「タム・ティ・ドラム」だ。「タム・ティ・ドラム」は、ケベックの民俗芸能を素材にした、エスプリとユーモアあふれるフォーク・バレエの傑作。同バレエ団の創設者リュドミラ・シリアエフの〝その土地に生きる文化の継承と創造を〟という方針で生まれた作品である。

カナダ三大バレエ団のひとつカナダ・グラン・バレエは、一般には前衛的な作風で（例えば上の写真「ダブル・カルテット」）知られている。だが創設者のシリアエフは、もともとロシア生まれでヨーロッパ育ち。ロシア人の天才振付師ミハイル・フォーチンの教えを受け、ベルリンやスイスで活躍したバレリーナ兼振付師。いわば本場ヨーロッパ・バレエの伝統の中で育った人である。

今回の日本公演のだし物「ロミオとジュリエット」、「セレナーデ」などは、この古典バレエの伝統が花開いた美しく気品ある舞台だ。

グラン・バレエは一九五八年の創立以来、保守的風習の強かったケベック州で、人々の自己解放の歩みと一緒に大きくなってきた。シリアエフが一九五〇年代初めにバレエ学校を開いた頃は、子持ちの女が公衆の面前で脚を上げるとは何事だと非難されたという。しかし彼女の自由に躍動するバレエ・スタイルは、草創期のテレビ電波にのって、ケベック人の感性を深く動かしていった。一九七〇年に、イギリスのロック・グループ「ザ・フー」のロック・オペラ「トミー」を公演して大成功を収めたのも、一昔前のケベックなら考えられもしなかったことだろう。

「トミー」の振付けをしたのは、モダンバレエ出身のフェルナン・ノー。同じ座付き振付師のブライアン・マクドナルドとともに、今回来日する。二人ともグラン・バレエの風格を作ってきたすぐれた振付師だ。

そのほかグラン・バレエには、マキューズ（モダンダンスと現代バレエの溝を埋めた成功作といわれる「海の見える風景」の振付け）やクデルカなど、すぐれたカナダ人振付師が集まっており、多彩なレパートリーを提供している。

公演日程は六月十四～十七日東京、二十～二十一日北海道、二十五～二十六日大阪、二十七日神戸、二十九日京都、七月一日福岡、二日小倉、四日名古屋、六日神奈川、七日福島、八日群馬、九日大宮。問合わせは民音予約センター（〇三—三六三—九一五一）まで。